

## 基礎となる修士課程及び既設研究科との関係

## 教育組織【2学部・4研究科】

## 大学院

修士課程

博士後期課程

## 美術研究科

【修士課程 9専攻】

絵画専攻／彫刻専攻／工芸専攻／  
デザイン専攻／建築専攻／芸術学専攻  
先端芸術表現専攻／文化財保存学専攻  
グローバルアートプラクティス専攻

## 美術研究科

【博士後期課程 2専攻】

美術専攻／文化財保存学専攻

## 音楽研究科

【修士課程 7専攻】

作曲専攻／声楽専攻／器楽専攻  
指揮専攻／邦楽専攻／音楽文化学専攻  
オペラ専攻

## 音楽研究科

【博士後期課程 1専攻】

音楽専攻

## 映像研究科

【修士課程 3専攻】

映画専攻／メディア映像専攻  
アニメーション専攻

## 映像研究科

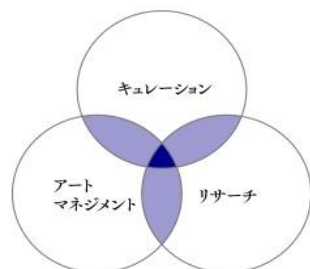
【博士後期課程 1専攻】

映像メディア学専攻

## 国際芸術創造研究科

【修士課程 1専攻】

アートプロデュース専攻



## 国際芸術創造研究科

【博士後期課程 1専攻】

※平成30年度新設  
アートプロデュース専攻

学位：博士（学術）

Doctor of Philosophy

本学の美術、音楽、映像  
の3領域を包括的に意味  
しつつ、広く芸術文化を領  
域横断的に扱うものとして  
博士（学術）とする。

修士課程から博士後期課程へ接続

## 大学院国際芸術創造研究科修士課程授業科目一覧

※特別研究指導を除く

(大学院国際芸術創造研究科アートプロデュース専攻 (M))

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
基礎科目	アートプロデュース概論 (アートマネジメントⅠ)	1前		2		○			1							
	アートプロデュース概論 (アートマネジメントⅡ)	1前		2		○					1					
	アートプロデュース概論 (リサーチⅠ)	1前		2		○			1							
	アートプロデュース概論 (リサーチⅡ)	1前		2		○			1							
	アートプロデュース概論 (キュレーションⅠ)	1前		2		○			1							
	アートプロデュース概論 (キュレーションⅡ)	1前		2		○				1						
	アートプロデュース特論 (アートマネジメントⅠ)	2前		2		○			1							
	アートプロデュース特論 (アートマネジメントⅡ)	2前		2		○					1					
	アートプロデュース特論 (リサーチⅠ)	2前		2		○			1							
	アートプロデュース特論 (リサーチⅡ)	2前		2		○			1							
	アートプロデュース特論 (キュレーションⅠ)	2前		2		○			1							
	アートプロデュース特論 (キュレーションⅡ)	2前		2		○				1						
	グローバル時代の芸術文化概論 (Arts in Globalization)	1前	2			○			3							
	美学Ⅰ	1前		2		○										兼1
	美学Ⅱ	1後		2		○										兼1
	音楽文化史Ⅰ	1前		2		○										兼1
	音楽文化史Ⅱ	1後		2		○										兼1
	著作権概論Ⅰ	1前		2		○										兼1
	著作権概論Ⅱ	1後		2		○										兼1
	映像プロデュース概論	1前		2		○										兼1
	芸術と情報	1後		2		○										兼1
	芸術文化批評方法論	1通		4		○										兼1
	アジア文化研究	1通		4		○										兼1
	芸術編集学	1後		2		○							1			
	国際交流・文化支援	1後		2		○							1			
小計 (25科目)		—	2	52				—	4	1	1	2	0		兼7	
実践科目	アートプロデュース演習 (アートマネジメントⅠ)	1通		4			○		1							
	アートプロデュース演習 (アートマネジメントⅡ)	1通		4			○				1					
	アートプロデュース演習 (リサーチⅠ)	1通		4			○		1							
	アートプロデュース演習 (リサーチⅡ)	1通		4			○		1							
	アートプロデュース演習 (キュレーションⅠ)	1通		4			○		1							
	アートプロデュース演習 (キュレーションⅡ)	1通		4			○			1						
	アートプロデュース特別演習 (アートマネジメントⅠ)	2通		4			○		1							
	アートプロデュース特別演習 (アートマネジメントⅡ)	2通		4			○				1					
	アートプロデュース特別演習 (リサーチⅠ)	2通		4			○		1							
	アートプロデュース特別演習 (リサーチⅡ)	2通		4			○		1							
	アートプロデュース特別演習 (キュレーションⅠ)	2通		4			○		1							
	アートプロデュース特別演習 (キュレーションⅡ)	2通		4			○			1						
	アートプロデュース総合実習Ⅰ	1通	4					○	4	1	1					
	アートプロデュース総合実習Ⅱ	2通	4					○	4	1	1					
小計 (14科目)		—	8	48			—	4	1	1	2	0				
合計 (39科目)		—	10	100			—	4	1	1	2	0		兼7		

## 授 業 科 目 の 概 要

(国際芸術創造研究科アートプロデュース専攻 (M) )

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
基	アートプロデュース概論 (アートマネジメントⅠ)	アートマネジメントの基礎概論を、1) 芸術と社会の関係の変遷、2) 政策、3) 法・制度、4) 市場経済、5) 組織運営などの諸側面から検討する。また、芸術支援に関して、英国のアーツカウンシル、米国の寄付文化など欧米の基礎的制度・様相を論じる。さらに、我が国の芸術支援制度に関して、文化芸術振興基本法から指定管理者制度、劇場法など、制度が現場にもたらした影響を、具体的な事例から検討する。また、非営利機関の経営に関して、総合的な政策とミッション制定、戦略の関係を考察する。	
礎	アートプロデュース概論 (アートマネジメントⅡ)	音楽マネジメントの基礎概論を、コンサートホール拠点の公演プロジェクトをモデルケースとして、1) スキームの策定とコンセプト構築、2) 公演企画と予算作成、3) コンサートを含むプロジェクトイベント全体の制作プラン、4) プロジェクトの広報・資金獲得・マーケティングを総合的に論じる。また、音楽家や作曲家等の芸術専門家との協働を前提とした、劇場・音楽堂のArtistic Administrationの基本的思想と姿勢、多様多岐にわたる専門実務家を統括するプロジェクトエディター(編集長)としての統合的ノウハウ、国際プロジェクト展開に不可欠なグローバルな見識や人脈づくりの基本等を具体的な事例を元に検証する。	
科	アートプロデュース概論 (リサーチⅠ)	芸術と社会の関係を社会学的視点から検討する。特に21世紀になって見られるグローバリゼーションの進展やメディア・テクノロジーの発展、そして資本主義の変容が、芸術と芸術を取り巻く環境にどのような影響を与えているのかを考察する。またこの変化が、都市の編成やコミュニティ、アイデンティティ、市民運動とどのように結びついているかを論じる。同時に、ウェバーやデュルケム、アドルノのような古典からルーマンやフーコー、ブルデューなど文化社会学理論までの理論的枠組みを検証する。	
目	アートプロデュース概論 (リサーチⅡ)	芸術作品は一般商品としての性格と思想性主観を含む特殊性の二面性をもつ。社会と芸術を考えるに当たって、芸術のもつ自由性から国家対国民の視点が重要である。一方、前者への接近は、一般の商品サービスを扱う経済学から行われている。芸術の固有価値が唱えられているが、経済的には外部経済効果といえる。かように、芸術のもつ商品性サービス性(財)について、経済学からの接近を行う。従って、基礎的経済学から宇沢弘文等「価格論」等の教科書を使用したやや程度の高い内容まで理解させた上で、芸術作品のもつ通常との商品と異なる価値について概論を講義する。	
目	アートプロデュース概論 (キュレーションⅠ)	アートの生産と流通、受容に関するエコシステムをあきらかにし、展示、生産、言説の場所としての美術館、インスタレーションの役割を体系的に分析、検証する。近代に生まれた欧米型の美術館が試みている修正と、新興の非西洋圏の美術館、アートセンターなどが模索する新しいあり方を理論とケーススタディで概論として講義する。	
目	アートプロデュース概論 (キュレーションⅡ)	美術館は現代社会からどのような影響を受け、変化を遂げているかを検討する。グローバリゼーションや情報メディアの進化、あるいは民主主義や資本主義の変化は、歴史/経済/政治/文化等を担うさまざまなステークホルダーがせめぎ合う美術館の「公共性」に大きな影響を与えているはずである。表現の自由、芸術家の支援、市民アイデンティティの創造といった美術館を支える基礎的な理念さえも変容を迫られていることを事例や論文をもとに検証する。	

## 授 業 科 目 の 概 要

(国際芸術創造研究科アートプロデュース専攻 (M) )

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
基	アートプロデュース特論 (アートマネジメントⅠ)	芸術と社会の関係に関する考察や、現代社会における美的表現の新たな概念構築を示す、内外の最新の理論書や論文を取り上げ、講読を中心にディスカッション形式の授業を行う。また、国内外の具体的な文化事業例をリサーチし、社会的背景や政策との関連、市民参加、拠点形成、アーティスト育成などの観点から比較検討を行う。	
	アートプロデュース特論 (アートマネジメントⅡ)	演奏科学部生、大学院生対象のコミュニティ・エンゲージメント活動トレーニング・コース企画運営をモデルケースに、1)演奏家ひとりひとりの資質や知識、芸術への取り組みを最大限に活かすコミュニティ・プログラムづくりの基礎とノウハウ、2)コミュニティのウォンツとニーズを把握するための基礎的知識や過去の事例に基づく関係性構築のノウハウを検証、演奏家とコミュニティを結ぶ音楽コーディネーター、演奏家の芸術面での資質を活かすプログラムづくりをサポートするファシリテーター像を考察する。	
礎	アートプロデュース特論 (リサーチⅠ)	デジタルメディアは既存のメディアを統合し「ポストメディア」と呼ばれる状況が見られつつある。この新しいメディア環境の下で「創造産業」と呼ばれる産業領域が生まれている。本科目では特にメディアの変容に焦点を絞り、それが音楽や美術、メディア文化産業、美術館や図書館等展示・アーカイブ制度、高等教育、そして人々の文化芸術実践にどのように影響を与えているのかを考察する。また「クールジャパン」「韓流」等グローバル化時代の文化政策のトランスナショナルな比較検討を行う。	
	アートプロデュース特論 (リサーチⅡ)	地方創生があらたな 이슈 (政治課題) となってきたように、地方は少子高齢化による崩壊の危機が迫っている。一方で、地域社会の存続のためには地域固有の価値である文化資源が有効に活用されると、地域社会の維持だけでなく、発展の期待されるようになることは、多くの事例が示している。ここでは、地域と固有価値をキーワードとして、関連論文を読みこなすと同時に事例研究・発表を行う。	
科	アートプロデュース特論 (キュレーションⅠ)	アートの領域を更新的に見直し、他の分野との関係を検証する。クロスディシプリナリーな創造の実践とそのプロセスを分析的に解明する。デザイン、建築、映画、演劇など他の芸術表現領域とアートの関係。および、科学、民族学、心理学、社会学、歴史、現代思想やそれらにまつわるリサーチとアートの関係をそれぞれ具体的な制作例をもとに検証する。方法論と言説の生成について。	
	アートプロデュース特論 (キュレーションⅡ)	美術館は現代社会からどのような影響を受け、変化を遂げているかを検討する。グローバリゼーションや情報メディアの進化、あるいは民主主義や資本主義の変化は、歴史/経済/政治/文化等を担うさまざまなステークホルダーがせめぎ合う美術館の「公共性」に大きな影響を与えているはずである。表現の自由、芸術家の支援、市民アイデンティティの創造といった美術館を支える基礎的な理念さえも変容を迫られていることを事例や論文をもとに検証する。	
目			



## 授 業 科 目 の 概 要

(国際芸術創造研究科アートプロデュース専攻 (M) )

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
基	芸術と情報	芸術と情報のかかわりについて、作品についてだけでなく創作活動を支える情報技術や思考という面での理論化について解説する。またこれから芸術活動を行っていくために、芸術のためのアーカイブの維持構築などの活動を知るとともに、現代の社会基盤を動かしている情報技術を意識して目に見えない部分にも問題意識を持つ。併せて情報について理解を深めるためのワークショップを行う。	
礎	芸術文化批評方法論	芸術やさまざまな文化をめぐる批評の方法論を実践的に習得することを目指す。文献調査や作品分析、聞き取り調査などさまざまなトレーニングによって論文や批評の執筆に必要とされる基本的な「書く」技術を身につけることを目標とする。過去の批評文の構造分析を行った上で実際に受講者がエッセイを書き、それを担当教員が添削指導を行うことで、実践的な技術を学ぶ。	
科	アジア文化研究	近代以降のアジア諸国では、西洋との対峙と隣国との相互作用を繰り返しながら、文化をめぐる慣習や価値観、イデオロギーが絶えず構築・再構築され、あるいは淘汰されてきた。 この授業では、音楽のみならず映画・美術・文学・建築・写真など多様なメディアを対象とし、自文化／異文化表象や文化帝国主義といった問題も射程に入れながら、アジアにおける文化表象の歴史的展開について考察を試みる。	
目	芸術編集学	アートをめぐる執筆・編集とはなんだろうか？ それはテキストやイメージを読み解き、それらについて執筆し、編集することである。本授業では、国際的に活躍するアートのプロフェッショナル育成に有効な、さまざまなライティング・編集技術を修得し、実践を行なう。授業はすべて英語で行なう。	
目	国際交流・文化支援	本授業はすべて英語で開講する。本授業では国際的に芸術支援を実施する諸機関について紹介し、そのミッション、機能、事業などについて理解することを目的とする。授業を通じてこうした機関の概要、設立背景、財源などを理解することで、将来的に自身の活動へ支援を受けるため、あるいはこうした機関でのインターンシップ、就職に役立つ知識を身につける。延いては自身の関わる芸術活動に向けられる支援が誰のどのような意図・背景・資金から成り立っているのか、そのためにどのような制限が生じ、成果が求められるのかについて考察する。	
実	アートプロデュース演習 (アートマネジメントⅠ)	アーツマネジメントの実践現場で、芸術文化プロジェクトの企画運営を経験する。現場の選定は、教員の直接の指導のもとに企画運営に携わるアートプロジェクトを中心に、学生個々の研究テーマによって選定し、担当業務や期間、目的を設定する。また随時ゼミを開催し、各人の担当業務を通じて課題発表を行い、アーツマネジメントの現場が抱える諸問題を議論する。	
科	アートプロデュース演習 (アートマネジメントⅡ)	コンサートホール拠点の公演企画制作を実践的に試みる。日本を代表する音楽家を教授陣に擁する藝大の特色を活かし、演奏科教員および選抜された本学学生と、海外から招聘する客員アーティストが共演するコンサートとその関連イベントを想定、プロジェクトミーティングおよびアーティストとの折衝や調整を中心としたプロデュース過程、実際の公演・イベントに向けての周知や印刷物製作、ステージ関連の諸作業表、運営マニュアル等の作成など、実務を中心とする演習を行う。	
目			

## 授 業 科 目 の 概 要

(国際芸術創造研究科アートプロデュース専攻 (M))

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
実   践	アートプロデュース演習 (リサーチ I)	聞き取り調査、フィールドワーク、参与観察等質的調査を中心に社会調査の基礎の学習と、実際の論文執筆のための実習を行う。また映像機器やインターネット等メディアを用いた映像人類学やデジタルエスノグラフィー、複数のフィールドの比較研究を行うマルチ・サイトド・リサーチ他芸術文化領域に対応した新しい調査研究方法の開発に積極的に取り組む。さらに、その際に生じるプライバシー保護など倫理規定や調査公害等の問題を学ぶ。	
	アートプロデュース演習 (リサーチ II)	文化政策は、戦前は規制行政的であったが、戦後給付型行政となった。その効果として文化芸術への支援助成制度は、国家对個人の私的契約の形をとり、パターンリズムが懸念されている。米国ではすでにNEAからの助成において対象芸術活動内容と助成が課題となっている。我が国においても、21世紀に入り文化芸術振興基本法、劇場法が成立し、従来の予算型行政から法整備による助成へと転換した。これは助成制度の充実ともいえるが、一方で違憲条件法理がからむ。ここでは、このような国家と助成対象者、鑑賞者との法的側面、助成内容について、討議する。	
科    目	アートプロデュース演習 (キュレーション I)	特定の美術館のコレクションを前提にそこから展覧会を組み立て、企画立案、展示構成などを仮想で行なう。芸大のコレクション、都内美術館のコレクションなどを前提とし、提携を通して、コレクション調査、整理、アーカイブ整備などにインターンとしてかかわる。歴史的なコンテキストの再構築、および異なったメディアウムや時代の作品を展示の中でマッピングする方法を具体的に習得する。歴史的な作品を現代の作品と併存させることなどを通して、現代における作品の価値や意味を再検証する。	
	アートプロデュース演習 (キュレーション II)	同時代の美術の国際的な潮流を、展覧会やシンポジウムの企画、及び定期刊行物の記事等をもとに分析する。批評や市場の影響関係についてもとらえ、そこで得た視点をもとに発信性の高い展覧会企画のテーマを考える。さらに参加者は個別に、具体的な開催地域を定め、架空の展覧会案（参加アーティストや作品の選定、会場構成、関連イベントなど）を作り上げ、図録掲載を想定した論文を執筆する。	
	アートプロデュース特別演習 (アートマネジメント I)	演習 I を通じて浮かび上がった実践現場の課題の分析を行うゼミ授業。現場に共通する課題を、文化政策における位置づけやアーティスト・マネジメント、国際交流などの観点からより幅広い知見を得るべく、最新の理論的考察や、国際的な実践事例を取り上げ、総合的な考察をおこなう。随時、国内外の第一線で活躍するゲスト（アーティスト、プロデューサー、研究者等）を招いて、知見を広める。	
	アートプロデュース特別演習 (アートマネジメント II)	コミュニティ活動を実践的に行っている公共ホールやアーツセンターの協力を得て、履修生のインターンシップ活動を伴う特別演習。その現場で得た知見を元に、演奏家学生が将来コミュニティ活動を行う際に必要な姿勢、知識、ノウハウを講座形式で行うトレーニングプログラムを構築、その際の教材となる「藝大コミュニティ・プログラム ハンドブック」編集や、演奏家学生のための集中型コミュニティ・プログラムワークショップ企画を試みる。	

## 授 業 科 目 の 概 要

(国際芸術創造研究科アートプロデュース専攻 (M) )

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
実	アートプロデュース特別演習 (リサーチ I)	最近の文化・芸術理論の基本的文献を取り上げ、精読を行うとともに、アカデミックライティングのための文献調査の基本的な方法論を習得する。G.Lovink and N.Rossiter (eds) (2007)、My Creativity Reader: Critique of Creative Industries、C.Bishop (2012)、Artificial Hells: Participatory Art and the Politics of Spectatorship、N. Thompson (ed) (2012)、Living as Form: Socially Engaged Art from 1991-2011を出発点とし、受講者の研究テーマに合わせて文献を選定する。	
践	アートプロデュース特別演習 (リサーチ II)	「アートプロデュース特論 (リサーチ II)」を踏まえ、文化経済学は当初欧州の研究者が中心となっていたため、演習では欧文の文献も用いて読みこなす。ここでは、芸術作品が貨幣交換可能か、あるいは国際文化経済学会会長 (スロスビー) 等が唱える固有価値論による芸術財の公共財論について、討論するほか、適宜外部の研究者 (池上惇京大名誉教授、安藤隆穂名大高等研究院長、浅子和美一橋大経済研究所教授等) や現場の運営者 (新国理事等) を招聘して演習の質を上げる。	
科	アートプロデュース特別演習 (キュレーション I)	年間4本程度、国際展、ユニークなテーマ展、シンポジウム (海外を含む) などを調査し、関係者、出品作家などにインタビューを行なう。当該企画についての報告、分析を通して、テーマ設定、作品構成、作家の制作過程、展覧会のアドミニストレーション、現代的な問題の参照などを総合的に検証する。報告とあわせて、内外のゲストのクリティック、キュレーター、アーティストなどを招き、それぞれのトピックについて意見交換のワークショップを行なう。	
目	アートプロデュース特別演習 (キュレーション II)	ゲストアーティストを招き、芸術創造のプロセスを体験する。ワークショップやレクチャーなどを通して、作品のコンセプトづくりから実際の作品制作に学生が参加する。美術の歴史/批評のコンテキストとアーティストの独創性との間に生じる交渉や矛盾と向き合い、理論的な解釈を与えることが求められる。まだ見ぬ作品をめぐって、批評し、鑑賞者となることで、創造の現場において必要とされる対話的な知性の獲得を目指す。	
	アートプロデュース総合実習 I	初年度の研究計画をもとにした受講者のプレゼンテーションに対し、各指導教員がそれぞれの専門的な立場から研究計画全体、研究を進める上での方法論等について指導を行う。	
	アートプロデュース総合実習 II	初年度の研究活動の報告と修士論文の進捗状況、そして二年次の研究計画をもとにした受講者のプレゼンテーションに対し、各指導教員がそれぞれの専門的な立場から研究計画全体、研究を進める上での方法論等について指導を行う。	